

護皇神社

護皇神社は、宇佐神宮の東、大尾山にある末社です。この神社では、神格化された和氣清麻呂（733-799）を祀っています。和氣清麻呂は、ある皇位継承争いを解決する際に彼が果たした役割でよく知られている廷臣です。彼はその時、使者として宇佐神宮へ向かい、八幡神から重要な神託を受けました。

清麻呂は岡山地方の名高い官人の家に生まれました。家族の志を継いで、彼は高官になり、数代の天皇のために仕えました。称徳天皇（718-770）の治世中、道鏡（700? -772）という、影響力を持ち、皇后とも近しかった僧侶が、次の天皇に指名されようと企てました。道鏡の野心を叶えるために、道鏡の支持者は、もし道鏡が天皇の位に就けば平和な統治になると、宇佐神宮の八幡神の神託が予言した、と発表しました。和氣広虫（730-799）という、女帝に信頼された女官は、その主張を調査するために宇佐神宮に送られることになっていました。しかし、彼女は体が弱かったため、彼女の弟である清麻呂が奈良（当時の日本の都）からの長い旅をするために選ばれました。

伝説によると、清麻呂は、宇佐での調査の途中、大尾神社で八幡神から神託を受けました。神託は、皇室の血を引く人だけが天皇の位に就くべきであると宣言したと言われています。これは道鏡が天皇になることを防ぐのに大きな影響を与えましたが、道鏡は清麻呂に復讐をしました。清麻呂は足の腱を切断され、鹿児島に追放されました。さらに、その南へ向かう道中で暗殺未遂にさえ遭いました。しかし、清麻呂は生き残り、道鏡の没落後に宮廷に戻って、桓武天皇（737-806）の信頼の厚い顧問になりました。

護皇神社は、19 世紀半ば以前に、菱形池の島に最初に建てられましたが、宇佐神宮の境内で行われた昭和の大改修（1932-1941 年）の際に現在の場所へ移されました。護皇神社は、近くの大尾神社とともに、2020 年に修復されました。和氣清麻呂は、不幸から守り、災害を避け、足の怪我を癒す神様として護皇神社で崇められています。